

# かごしま医療過疎

島・へき地支える

時折小雨がばらつく2月中旬の午後。徳之島診療所(徳之島町)の丸尾周三所長(31)は池田町子看護師(49)と往診に出た。車は海岸沿いの道を走り、風に揺れるサトウキビ畑を抜けて、民家前に止まった。

①

「こんにちは。調子はどうですかあ」。丸尾所長は慣れた様子で家にあがり、居間に向かう。糖尿を患う男性の心音や血圧、足のむくみを確認しながら、家族に生活の様子や体重変動など、質問を重ねていく。

丸尾所長は医師になって6年目。大学卒業後、鹿児島市の民間病院で初期研修を受け、後期研修中の2008年4月、診

## 若い力



往診先で患者の話に耳を傾ける丸尾周三所長(右)  
=天城町

## 住民と向き合い成長

療所に赴任、1年後に所長となった。専門は内科だが、島では、赤ちゃんから100

歳を超えるお年寄りまで、あらゆる症状に向き合う「何でも屋」。外科系疾患も簡単な縫合程度であれば自分でこなす。

地域医療を担うきっかけになったのは、大学6年だった03年初夏の体験だ。鹿児島市内の病院で1カ月間の実習中、救急車で運ばれてきた女性が亡くなった。初めて直面した身内以外の人の死。

小さい子どもが「お母さん、お母さん」と呼び続けた。死に對する家族の思い、人生の重みを感じた。大きな病院で自分の専門に特化

して患者を診るより、幅広い疾患に對応できる知人。1日約80人の外来患者に、患者と向き合い、そ加え、往診や老人ホームの人の人生に寄り添って約140人を受け持つ。2日に1回の自宅待機をこなし、所長としての経験にも目を向けなければならぬ。「患者と向

けになったのは、大学6年だった03年初夏の体験だ。鹿児島市内の病院で1カ月間の実習中、救急車で運ばれてきた女性が亡くなった。初めて直面した身内以外の人の死。

小さい子どもが「お母さん、お母さん」と呼び続けた。死に對する家族の思い、人生の重みを感じた。大きな病院で自分の専門に特化

して患者を診るより、幅広い疾患に對応できる知人。1日約80人の外来患者に、患者と向き合い、そ加え、往診や老人ホームの人の人生に寄り添って約140人を受け持つ。2日に1回の自宅待機をこなし、所長としての経験にも目を向けなければならぬ。「患者と向

けになったのは、大学6年だった03年初夏の体験だ。鹿児島市内の病院で1カ月間の実習中、救急車で運ばれてきた女性が亡くなった。初めて直面した身内以外の人の死。

小さい子どもが「お母さん、お母さん」と呼び続けた。死に對する家族の思い、人生の重みを感じた。大きな病院で自分の専門に特化

して患者を診るより、幅広い疾患に對応できる知人。1日約80人の外来患者に、患者と向き合い、そ加え、往診や老人ホームの人の人生に寄り添って約140人を受け持つ。2日に1回の自宅待機をこなし、所長としての経験にも目を向けなければならぬ。「患者と向

けになったのは、大学6年だった03年初夏の体験だ。鹿児島市内の病院で1カ月間の実習中、救急車で運ばれてきた女性が亡くなった。初めて直面した身内以外の人の死。

して患者を診るより、幅広い疾患に對応できる知人。1日約80人の外来患者に、患者と向き合い、そ加え、往診や老人ホームの人の人生に寄り添って約140人を受け持つ。2日に1回の自宅待機をこなし、所長としての経験にも目を向けなければならぬ。「患者と向

小さい子どもが「お母さん、お母さん」と呼び続けた。死に對する家族の思い、人生の重みを感じた。大きな病院で自分の専門に特化

して患者を診るより、幅広い疾患に對応できる知人。1日約80人の外来患者に、患者と向き合い、そ加え、往診や老人ホームの人の人生に寄り添って約140人を受け持つ。2日に1回の自宅待機をこなし、所長としての経験にも目を向けなければならぬ。「患者と向

けになったのは、大学6年だった03年初夏の体験だ。鹿児島市内の病院で1カ月間の実習中、救急車で運ばれてきた女性が亡くなった。初めて直面した身内以外の人の死。

して患者を診るより、幅広い疾患に對応できる知人。1日約80人の外来患者に、患者と向き合い、そ加え、往診や老人ホームの人の人生に寄り添って約140人を受け持つ。2日に1回の自宅待機をこなし、所長としての経験にも目を向けなければならぬ。「患者と向

小さい子どもが「お母さん、お母さん」と呼び続けた。死に對する家族の思い、人生の重みを感じた。大きな病院で自分の専門に特化

して患者を診るより、幅広い疾患に對応できる知人。1日約80人の外来患者に、患者と向き合い、そ加え、往診や老人ホームの人の人生に寄り添って約140人を受け持つ。2日に1回の自宅待機をこなし、所長としての経験にも目を向けなければならぬ。「患者と向

けになったのは、大学6年だった03年初夏の体験だ。鹿児島市内の病院で1カ月間の実習中、救急車で運ばれてきた女性が亡くなった。初めて直面した身内以外の人の死。

して患者を診るより、幅広い疾患に對応できる知人。1日約80人の外来患者に、患者と向き合い、そ加え、往診や老人ホームの人の人生に寄り添って約140人を受け持つ。2日に1回の自宅待機をこなし、所長としての経験にも目を向けなければならぬ。「患者と向

小さい子どもが「お母さん、お母さん」と呼び続けた。死に對する家族の思い、人生の重みを感じた。大きな病院で自分の専門に特化

して患者を診るより、幅広い疾患に對応できる知人。1日約80人の外来患者に、患者と向き合い、そ加え、往診や老人ホームの人の人生に寄り添って約140人を受け持つ。2日に1回の自宅待機をこなし、所長としての経験にも目を向けなければならぬ。「患者と向

けになったのは、大学6年だった03年初夏の体験だ。鹿児島市内の病院で1カ月間の実習中、救急車で運ばれてきた女性が亡くなった。初めて直面した身内以外の人の死。

して患者を診るより、幅広い疾患に對応できる知人。1日約80人の外来患者に、患者と向き合い、そ加え、往診や老人ホームの人の人生に寄り添って約140人を受け持つ。2日に1回の自宅待機をこなし、所長としての経験にも目を向けなければならぬ。「患者と向

小さい子どもが「お母さん、お母さん」と呼び続けた。死に對する家族の思い、人生の重みを感じた。大きな病院で自分の専門に特化

して患者を診るより、幅広い疾患に對応できる知人。1日約80人の外来患者に、患者と向き合い、そ加え、往診や老人ホームの人の人生に寄り添って約140人を受け持つ。2日に1回の自宅待機をこなし、所長としての経験にも目を向けなければならぬ。「患者と向

けになったのは、大学6年だった03年初夏の体験だ。鹿児島市内の病院で1カ月間の実習中、救急車で運ばれてきた女性が亡くなった。初めて直面した身内以外の人の死。

して患者を診るより、幅広い疾患に對応できる知人。1日約80人の外来患者に、患者と向き合い、そ加え、往診や老人ホームの人の人生に寄り添って約140人を受け持つ。2日に1回の自宅待機をこなし、所長としての経験にも目を向けなければならぬ。「患者と向

支えだった。戸惑いや忙しさがやがいに変わり、自信を深めていった。今春、後期研修を終え、鹿児島市内の病院に戻る。循環器や消化器など専門技術を磨き、対応できる疾患の幅を広げるつもりだ。その後はまだ分からない。でも「医師としての最後の5年は地域の診療所に帰る」と決めている。島でそう誓った。

医師不足や医師偏在が進む鹿児島県内の離島やへき地で、懸命に地域医療を支える人たちがいる。「医療過疎地」での医師の奮闘を追い、地域医療の再生を考える。

次回から社会面に掲載します。